

平成30年度 文化展描画部会 反省と講評

《描画展全体》

- ・今年度も各学校から出品された作品を一同に集め、複数の審査員により各学年30点を選出する方法で審査を行った。各部会の負担が軽減されることや複数の審査員の協議により審査を行うため、選出の傾向が偏りにくいことなどが利点である。しかし直接、評価やアドバイスなどを伝えることができなくなったので、下の審査講評を参考にしてほしい。
- ・審査会はスムーズに進んだ。点検作業も協力して手際よく行うことができた。各学年からの選出30点という数は現段階ではちょうどよい。だが、児童生徒は減っているなのでこれからは30点が多すぎるようになるかもしれない。今回は審査日が文化展直前でギリギリだったが、その分、指導は長くできた。
- ・提出してもらった名簿は審査会でデータをまとめてネームカードとして印刷しているが、次年度にはもっとデータの形をシンプルにして、各支部やまとめる際の負担を軽減したい。

《小学校審査講評》

【低学年】

- ・いきいきとした動きで、視線まで意識して描かれていた。輪郭線がはっきりとしていない作品はどうしても弱い印象となる。また、単調な色合いの作品は、重ね塗りの技法などを効果的に使うともっと良くなると思う。
- ・構図や色塗り、背景処理において低学年という学年の実態に合った作品が望まれる。その際、背景全面に色を塗るという仕上げから、色がついてない部分を少し残すなどして、主題となる主人公を一番目立たせるような工夫も必要である。

【中学年】

- ・人物の肌の色に工夫が見られる作品があった。基本的には朱色をベースに混色を工夫していくと良いと思う。
- ・人物は正面を向いている作品だけでなく、斜め横の構図や対象物の方を向く視線などにも配慮すると、より表情豊かな作品となる。
- ・人物のゼッケンの名前などはあまり目立たせないほうがよい。人はどうしても文字に目がいつってしまうので、少し影を被せるなど工夫し、本当に見せたい部分が画面の中で強くなるようにすると良い。

【高学年】

- ・風景画では大胆な構図や、色やタッチによる遠近の描き分けが工夫されていた。
- ・比較的色の薄い作品は、塗り込みをもっと行うと完成度が上がると思う。実際に屋外に出て地域を周り、普段と違う視点で風景を見ていくと色々な発見や感動があり、絵にも深みがでてくるはずである。写真はあくまでも参考であるという確認をしておくとうい。

《中学校審査講評》

【中学1年生】

- ・モチーフの選び方に課題がある。構図などを考えてほしい。1年生は2・3年に較べれば時数も多いので一度屋外に出て構図の説明をしたり、デジタルカメラなどを使って構図に特化した授業を行うなど工夫すると良い。
- ・色が薄い作品があった。強い暗色を始めに置かせるなど、もっと明暗を描き分けるとよい。

【中学2年生】

- ・正面からの作品が多かった。もっと奥行きを意識してほしい。
- ・忙しい学年という一面もあるが、塗り込みが足りない作品があり、他の学年に較べても特に薄い作品があった。固有色にこだわることなく、対象の明暗を観察し、独自の色調を大胆に追求してほしい。
- ・力強く自分を表現した自画像が魅力的であった。

【中学3年生】

- ・最上級生としてさすがと思わせるような作品が多く見られた。驚くほど細かいタッチで描き込まれた作品など、独自性の強さが印象的であった。
- ・透視図法を自分のものにして、正確に形を捉えている作品が多かった。少ない授業時間でじっくり描き込んだ密度の濃い作品が多かった。